

## 今年の酸欠が長いのは・・・

霞ヶ浦北浦における酸欠は、一般的には9月の下旬頃になると、解消に向かうのが普通の状態です。しかし、この夏は10月に入っても、各養殖漁場で酸素量の低い状態がみられ、なかなか回復してくれませんでした。

なぜ酸欠の時期がこのように長く続いたのか、その理由について考えてみたいと思います。

霞ヶ浦北浦の酸欠は、水温と密接な関係にあることが推測され、水温が高くなると酸欠が始まり、夏も終わりになって水温が下がってくると、次第に酸素量も安定してきます。

図1は、昭和55年～平成6年の手賀漁場と江川漁場における、9月の底層の水温と酸素量との関係をみたものです。

これによるとどちらの漁場でも、水温が22～23℃以上では、底層の酸素量が1～2ppmになっている日が多く観測されていますが、水温が22～23℃以下になると、酸素量が1～2ppm以下になることはなくなり、2～3ppm以上と少し高めに なっています。

このことから夏の終わりの養殖漁場における酸欠の終息は、湖の水温が22～23℃にまで低下した時が一応の目安になり、その後水温が次第に低下するのに従って、酸素量も徐々に安定してくるものと思われます。

図2は平成2年と3年そして今年の8月～10月の、内水試棧橋で測定した、午前9時の表面水温の変化を示したものです。

昨年の夏は異常冷夏といわれ、湖の水温も低い日が続いていましたが、しかし、9月の中旬には前年とほぼ同じ水準となって推移しています。

これに対して、今年の夏は大変な猛暑で、湖の水温も既に「かわら版」でお知らせしたように、8月では連日30℃以上を越えるような高い状態でした。

このような水温の高い状態が、現在までずっと続いており、10月には約3℃近くも高くなっている様子が、この図からわかるといえます。

先に、湖の水温が22～23℃に低下した時が、酸欠終息の一応の目安になりそうだと述べました。

図には、水温22℃のところを引いてあります。

昨年、一昨年と水温22℃になっているのは9月の下旬頃ですが、今年は今も述べたように水温が高く、水温が22℃に下がったのは、ようやく10月の中旬になってからでした。

このように例年なら9月下旬頃は、次第に酸素量が安定してくるのに対し、今年の酸欠が長期間に渡ったのは、10月に入っても湖の水温が、なかなか下がらなかったことが原因のように考えられます。

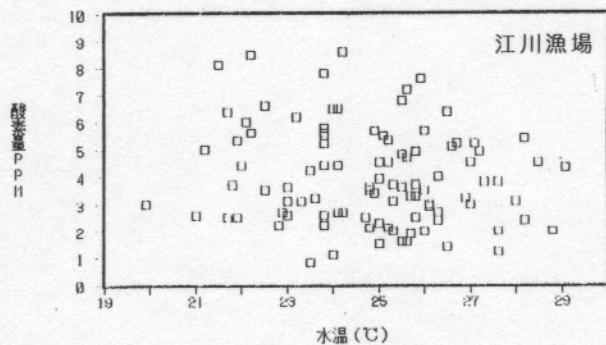
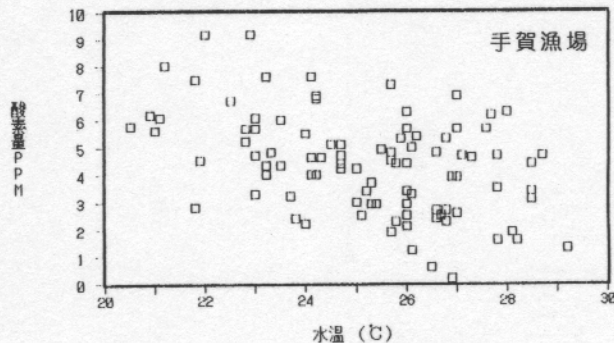


図1 9月の底層の水温と酸素量との関係

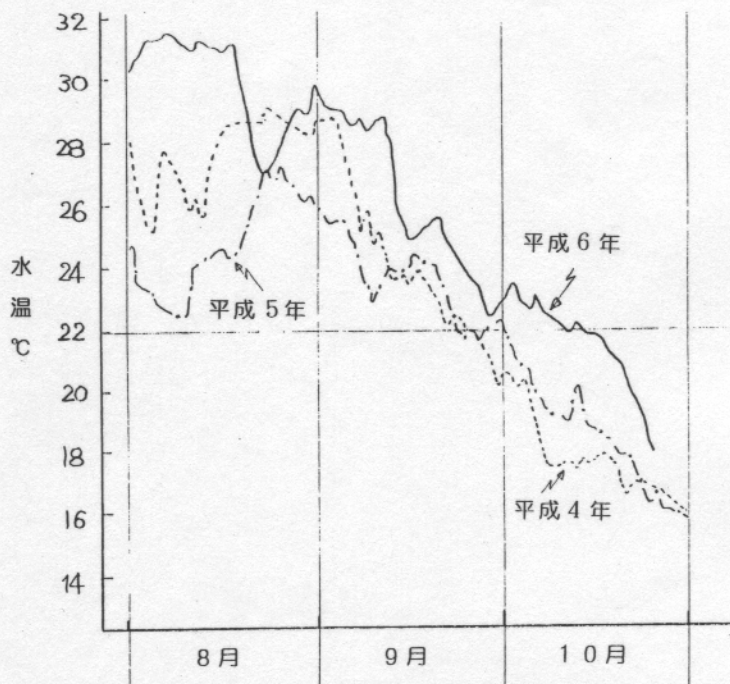


図2 水温の推移 (内水試棧橋・9時表層)